

## 英語多読授業のアクションリサーチ

井村 誠\*

知的財産学部 知的財産学科  
(2021年12月2日受理)

### Action Research of English Extensive Reading Classes by Makoto IMURA

Department of Intellectual Property  
Faculty of Intellectual Property

#### Abstract

Three semesters have passed since the author launched an English extensive reading course in the Department of Intellectual Property. This paper reports on the outcomes of assessment tests and questionnaire surveys conducted during the three semesters and discusses ways to improve the course design based on action research. Extensive reading was found to have a positive impact on students' motivation to learn English although the amount of reading in the limited period of a single semester may not be sufficient for significant gains in English proficiency. Action research, however, provides valuable hints for improvement that may result in optimal short-term gains in the future.

キーワード ; 多読, オンライン多読システム, Xreading, アクションリサーチ

**Keyword ;** Extensive Reading, Online Extensive Reading System, Xreading, Action Research

---

\* 大阪工業大学知的財産学部

## 1. はじめに

2020年度に本学知的財産学部で開講した英語多読授業<sup>1)</sup>が2年目を迎えた。本稿は3期目を終えた当該授業の実践報告である。この間もコロナウィルスの感染拡大は収まらず、ほとんどの授業をオンラインで実施することを余儀なくされたが、当初よりオンライン多読システム(Xreading)<sup>2)</sup>とLMS(Moodle)を組み合わせる形でリモート学習環境を整えていたため、授業運営上の支障はなかった。

本稿では、まず読書統計とアセスメントテストの結果分析から、多読が英語の運用能力におよぼす影響について考察する。次にアンケート結果に基づいて、多読が学生の英語学習に対するモチベーションにあたる影響を分析する。またこの間のアクションリサーチに基づく授業改善の試みと、併せて短期間ながらも対面授業が許された期間の授業活動についても報告する。

## 2. 対象クラス

対象とするクラスは、2020年度から2021年度春学期までに実施した2年生以上を対象とする選択科目(100分×14週)である。表1に各クラスの履修人数、TOEICの平均点および標準偏差を示す(このうちCL1とCL2は全てオンライン授業、CL3は14週の内8回がオンライン授業、6回が対面授業)。

表—1 対象クラス  
Table 1 Class Profile

クラス	年度	学期	履修者	TOEIC 平均	sd
CL1	2020	春	35	248	91
CL2	2020	秋	26	299	124
CL3	2021	春	27	377	130

## 3. 読書統計

### 3.1 読書量

目標語数はCL1では50,000語、CL2とCL3では40,000語に設定し、それぞれ単位取得に必要な最低要件とした。CL2以降に目標語数を減らしたのは、CL1での授業アンケートに基づく判断であったが、これについては、見直す必要があると考えている。理由は後述する。結果として、全てのクラスで8割以上の学生が目標語数を達成した(表—2)。

表—2 読書量(語数)

クラス	履修者	目標語数	達成者(率)	最高
CL1	35	50,000	29 (83%)	67,763
CL2	26	40,000	22 (85%)	80,301
CL3	27	40,000	25 (93%)	50,586

### 3.2 リーディングスピード

本を楽しんで読むには、ある程度のスピードが必要である。因みに英語母語話者は1分間に200語から300語のペースで読むといわれており、TOEICのナレーションやオーディオブックの朗読は1分間に150語から160語程度である。学習者の場合は、およそ1分間に100語以上のスピードで読めれば、概ね自分に合ったレベルの本を無理なく理解しながら読めていると考えられる。<sup>3)</sup>

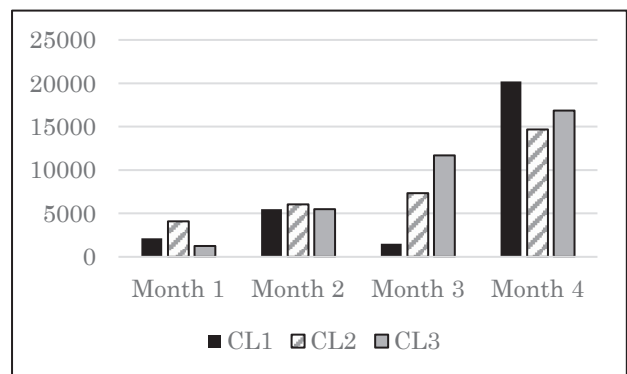
授業では3週目と13週目に簡単なテキスト<sup>4)</sup>を使ってリーディングスピードを測定することにしてある。結果として、それぞれ15%から30%のリーディングスピードの上昇が見られた(表—3)。

表—3 リーディングスピード(wpm)

クラス	n	pre	post	増加率
CL1	22	94.0	108.8	+15.7%
CL2	13	97.8	126.8	+29.6%
CL3	22	104.7	128.0	+22.2%

n : pre / post とともに測定した学生

### 3.3 リーディングパターン



図—1 月別平均読書量の推移(語数)

Fig. 1 Monthly Reading Pattern

図—1は、各クラスの月別平均読書量の推移を示している。月ごとに読書量が増えていくのは望ましいことだが、いずれのクラスも最終月になって単位取得のためにあわてて読む学生が多かったことが分かる（特にCL1）。

#### 4. アセスメントテスト

##### 4.1 実施テストと診断基準

当初よりアセスメントテストとして、ピアソン社<sup>5)</sup>が開発したテストを利用している。当該授業は、後述するように、多読を中心として英語の4技能を総合的に向上させる学習活動に結び付けることを目標としている(5. アクションリサーチ)。ピアソン社の診断テストは、Reading, Listening, Speaking, Writingのそれぞれの項目における効果が測定できる点でこの要件を満たしている。診断結果はGSE (Global Standard of English) という数値スケールで示され、それは以下に示すように、グローバルスタンダードであるCEFR<sup>6)</sup>に対応している(表—4)。

また当該テストは項目応答方式と呼ばれるテスト方式を採用しており、回答の正否に応じて問題の難易度が調整されるので、学習者の能力に応じて柔軟にきめ細かな診断ができるという利点もある。

表—4 GSE と CEFR  
Table 4 GSE & CEFR

GSE	CEFR
85-90	C2
76-84	C1
59-75	B2
43-58	B1
30-42	A2
22-29	A1
10-21	<A1

なお、テストの名称は2021年度よりプログレステストからベンチマークテストに変更となり、診断項目が「4技能」+「文法力」+「語彙力」から「4技能」のみとなったが、問題内容は基本的に変わっておらず、同一の診断指標に基づいている。テストはオンラインで受けることができる。以下に問題構成を示す(括弧内はベンチマークテストでの変更)。

##### 【セクション1】語彙・リーディング (+ 文法)

- 穴埋め問題

- 選択問題
- 読解問題

##### 【セクション2】リスニング・スピーキング

- 音読問題
- 書き取り問題
- 復唱問題
- 描写問題
- 聞き取り問題 (削除)

##### 【セクション3】ライティング

- 要約問題
- 描写問題
- (+ ショートエッセイ)

所要時間は約60分で、結果はAIが判定して受験後即座に確認することができる。

#### 4.2 結果

表—5から表—7に各クラスで実施したアセスメントテストの項目別平均点(GSE)を示す。

表—5 アセスメントテスト結果 (CL1)  
Table 5 Assessment Test (CL1)

クラス pre/post	CL1 (n=29)			
	pre	<i>Sd</i>	post	<i>sd</i>
Overall	20.4	9.5	19.9	9.1
Reading	24.0	9.5	22.7	9.5
Listening	19.5	9.5	19.2	9.3
Speaking	19.8	9.6	20.0	10.4
Writing	20.7	8.3	20.7	9.3

*n* : pre / post とともに測定した学生

表—6 アセスメントテスト結果 (CL2)  
Table 6 Assessment Test (CL2)

クラス pre/post	CL2 (n=19)			
	pre	<i>sd</i>	post	<i>sd</i>
Overall	18.8	9.7	21.9 ( <i>p</i> <0.05)	10.2
Reading	20.7	10.6	24.1 ( <i>p</i> <0.05)	10.9
Listening	18.4	10.3	20.9	10.4
Speaking	16.5	9.9	20.6	11.3
Writing	20.2	10.4	22.6	10.4

*n* : pre / post とともに測定した学生

表—7 アセスメントテスト結果 (CL3)  
Table 7 Assessment Test (CL3)

クラス	CL3 (n=18)			
	pre	sd	post	sd
Overall	20.0	5.8	21.9	5.8
Reading	20.0	7.7	20.7	5.1
Listening	22.3	7.2	23.5	8.2
Speaking	24.3	6.9	23.6	5.5
Writing	22.7	5.1	22.2	4.1

n : pre / post とともに測定した学生

なお、下限値未満および上限値超えのスコアについては、統計処理のため、それぞれの境界値に1点加減した整数値に置き換えて計算している（例： $<10 \rightarrow 9$ 点、 $>35 \rightarrow 36$ 点）。

CL2の総合スコアおよびリーディングのスコアにおいて上昇が見られたが、それ以外は、統計的に有意な差は見られなかった。学生個々の得点を前後で比較してみるとCL2ではほとんどの学生の得点が上がっているのに対して、CL1とCL3では得点の下がったものも多く、相殺した形になっている（表-8）。

表-8 得点増減別人数内訳

Table 8 The Number of Students by Score Increase/Decrease

得点増減	CL1	CL2	CL3
+	7	14	11
0	10	4	0
-	12	1	7

図-2は、CL1からCL3までを統合した読書量とpostテストの得点との相関を示している。

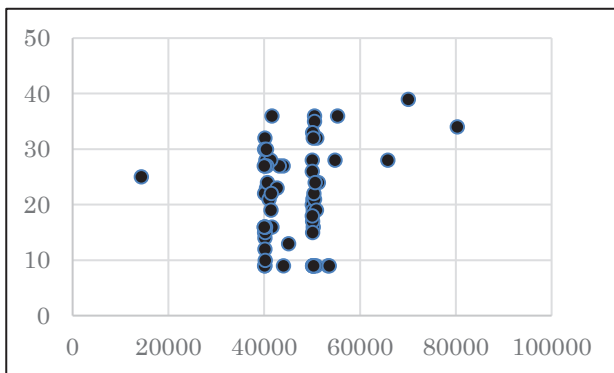


図-2 読書量と post テストの相関

Fig. 2 Correlation between Post Test Scores and Words Read

目標語数（CL1：5万語／CL2・CL3：4万語）付近には、あらゆる層の学生が集中しているが、目標語数を超えて読んだ学生は高得点の領域に分布していることが分かる。

次に、図-3は読書量とpre/postテストにおける得点の増減との相関を示している。目標語数を達成した学生の過半数はpostテストで得点が増加している。ところが、目標語数をはるかに超えて読んだ学生の得点は伸びていない。これらの学生はいずれもpreテストですでに高得点をとっており、学習曲線におけるプラトー段階（平原状態）にあると思われる。

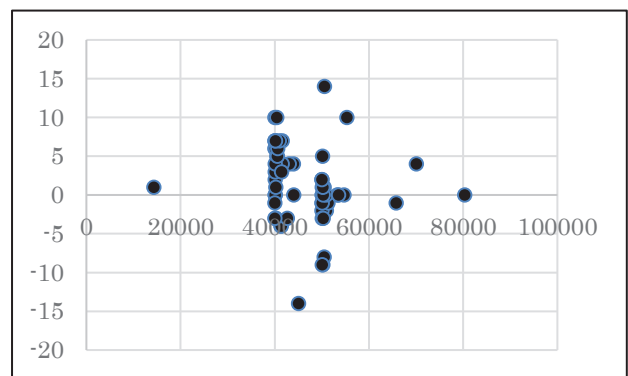


図-3 読書量と得点増減との相関

Fig. 3 Correlation between Pre-post Score Differences and Words Read

図-4は、preテストの成績とpostテストにおける得点増減との相関である。近似線が示すように若干ではあるが負の相関が見られた（ $r = -0.27$ ）。これは、低学力層の方が高学力層に比べて伸び代が大きい可能性があることを示唆している。

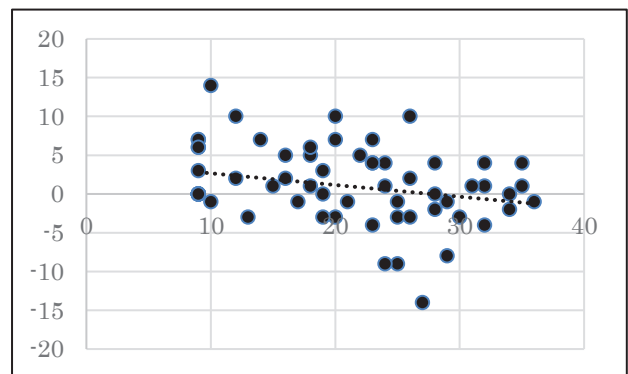


図-4 Preテストと得点増減との相関

Fig. 4 Correlation between Pre-test Scores and Pre-post Score Differences

### 4.3 授業アンケート

#### (1) 多読を行った感想

表—9に示すように、受講生のほとんどが多読をやった良かったと回答している。

表—9 アンケート：多読をやった良かったか

Table 9 Survey: Do you think it was worth doing ER?

多読をやったよかったですか?	CL1 n=28	CL2 n=19	CL3 n=22
はい	26 (93%)	18 (95%)	19 (86%)
いいえ	0 (0%)	0 (0%)	1 (5%)
どちらとも言えない	2 (7%)	1 (5%)	2 (9%)

n：アンケート回答者数

「はい」と答えた主な理由として、以下のような記述がみられた。

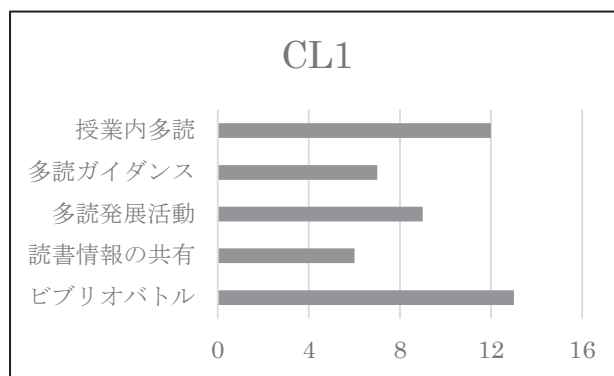
- 英語に触れる機会が増えた
- 英語に対する興味がわいた
- 苦手意識が薄まった
- 興味に合った内容で英語を学べる
- 英語の基礎力を身につけることができた
- 読むスピードが上がった
- 単語力や読解力がついた
- 英語を英語のまま理解する力がついた

カテゴリー別に見ると、英語に触れる機会や興味、苦手意識の解消などに関する記述はCL1とCL2に、スキルの向上に関する記述はCL3に多かった。CL3は3つのクラスの中でTOEICの平均点が最も高く、そのことがスキルに対する意識の高さと関係しているのかもしれない。

なおCL3で「いいえ」と答えた学生は、その理由について回答していない。この学生は、最後まで授業に参加していたが、目標語数を達成できなかった。

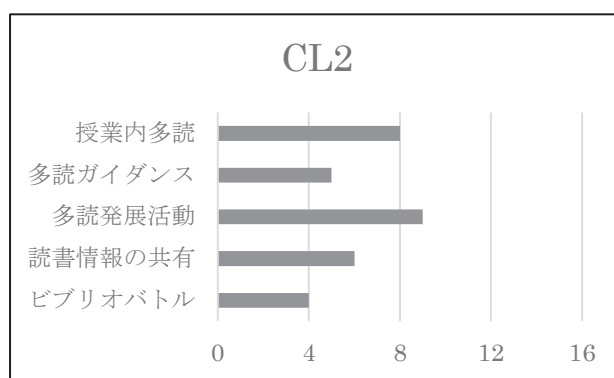
#### (2) 授業内活動に対する評価

多読は学習者が普段の生活で主体的に取り組むことに意味があり、したがって授業では、むしろ授業外での多読を促進するためにモチベーションを上げることが目標とした。毎回の授業は基本的に4つのパートから構成されており、さらに4技能を統合させた成果発表的な活動として、英語によるビブリオバトル<sup>7)</sup>を行っている。この中でとくに多読のモチベーション向上につながったと思うものについて尋ねた結果（複数回答可）を図—5～7に示す。



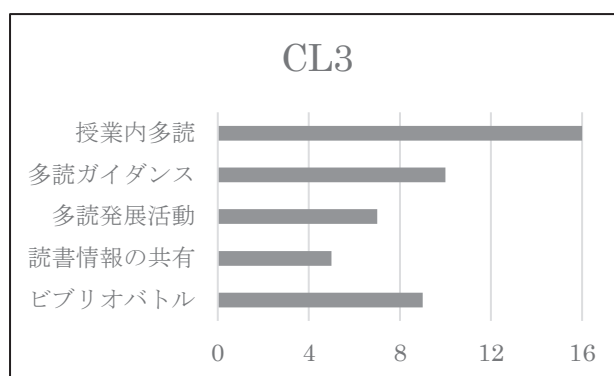
図—5 授業区分とモチベーション (CL1)

Fig. 5 Lesson Segments and Motivation (CL1)



図—6 授業区分とモチベーション (CL2)

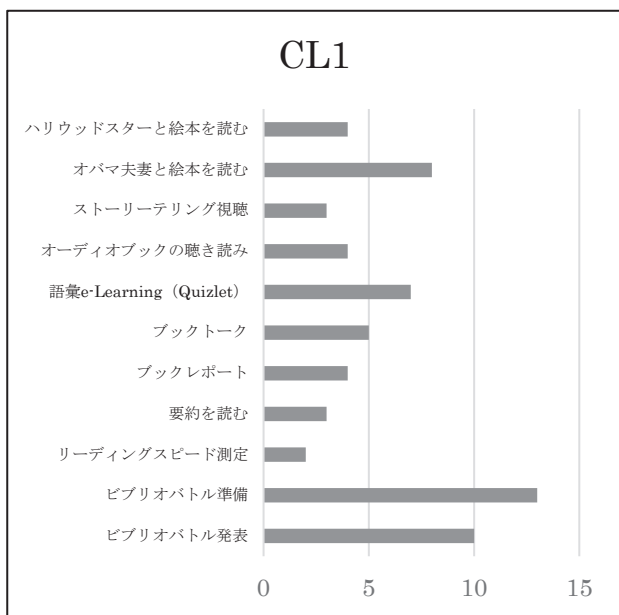
Fig. 6 Lesson Segments and Motivation (CL2)



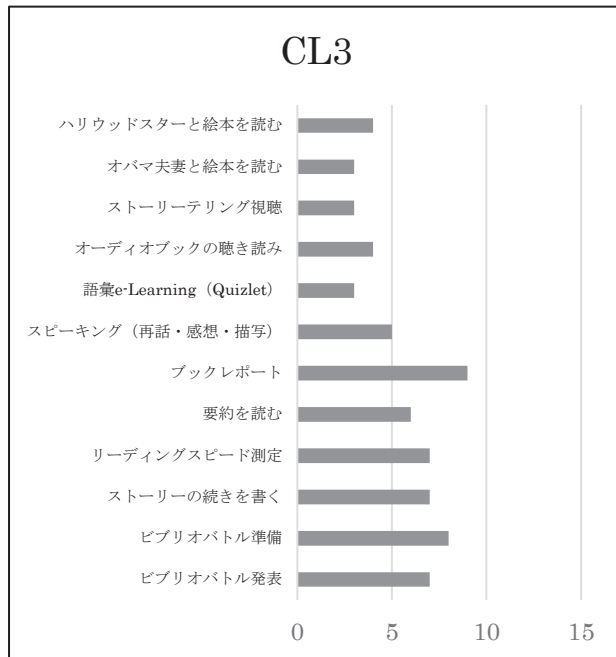
図—7 授業区分とモチベーション (CL3)

Fig. 7 Lesson Segments and Motivation (CL3)

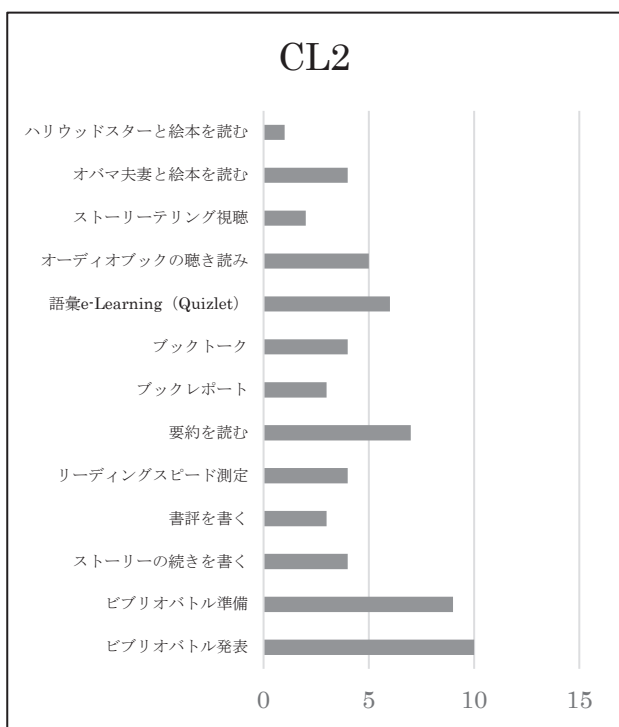
また、この中で多読を4技能につなげるための実質的な英語学習活動である「多読発展活動」のうち、とくに英語の力がつくと思った活動について尋ねた結果（複数回答可）を図—8～10に示す。



図—8 学習活動とスキル向上感 (CL1)  
Fig.8 Learning Activities and Efficacy (CL1)



図—10 学習活動とスキル向上感 (CL3)  
Fig.10 Learning Activities and Efficacy (CL3)



図—9 学習活動とスキル向上感 (CL2)  
Fig.9 Learning Activities and Efficacy (CL2)

活動内容に若干の異動があるが、概ねどのクラスでもビブリオバトルをあげる学生が多かった。

(3) 受講感想 (自由記述)

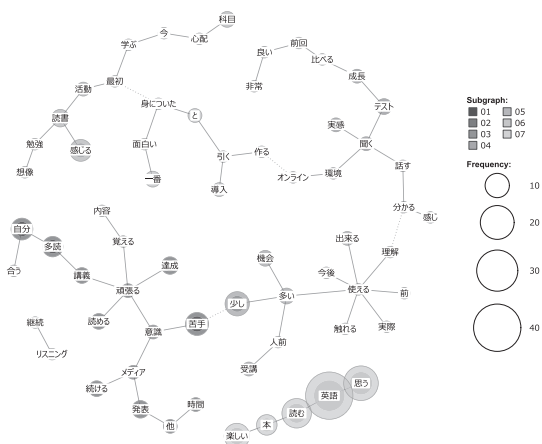
最後に CL1 から CL3 までの受講感想のテキスト (1,568 語) を KH Corder<sup>8)</sup> を用いて分析したところ、頻出語 (10 位まで) は表—10 のようになった。

表—10 受講感想頻出語  
Table 10 Frequent Words Appeared in Student Feedback on the Course

抽出語	出現回数
英語	40
思う	21
授業	16
読む	15
楽しい	11
少し	10
苦手	9
ありがとう	8
ビブリオバトル	8
感じる	8

さらに、受講感想に見られる語の共起ネットワーク (図—11) から、「英語」は「読む」「本」「楽しい」「思う」などに、「少し」は「多い」「苦手」「意

識」などに、そして「感じる」は、「読書」「活動」などの語と結びついていることが分かる。



図一 1 1 受講感想に見られる語の共起ネットワーク

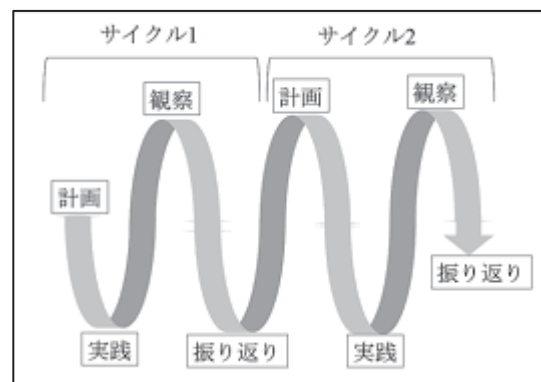
Fig.11 Co-occurrence Network of Words in Student Feedback on the Course

なお「苦手」という語が9回出現しているが、次のようにほとんどが肯定的な文脈の中で用いられている。

- 苦手な英語がそんなにいやに思わなかった
- 苦手な科目でしたが、英語の本を読むことによって少し克服することができたと思います。
- リスニングとライティングが苦手ということがわかった。
- 英語の長文に対して苦手意識があったが、多読活動を通してそれがなくなったと感じている。
- プログレステストは、機器の問題と形式がシビアなので、少し苦手でしたが、講義内容はとても満足のいくものでした。
- 少しでも英語を読めるようになり、以前よりも苦手意識は減りました。
- 苦手な英語に触れる機会が多くあったので良かったと思う。
- 人前で発表する機会が多くて、人前で発表することが苦手な僕にとっては少ししんどかった。それでも、発表する機会が多かったことによって、少しだけだが、苦手意識がなくなっていった。

## 5. アクションリサーチ

アクションリサーチは、計画 (Planning)、実践 (Action)、観察 (Observation)、振り返り (Reflection) のサイクルを繰り返すことにより問題点を明らかにし、現状を改善していくことを目的とした実践的研究であり、授業改善の方法としても用いられている。



図一 1 2 アクションリサーチ<sup>9)</sup>

Fig.12 Action Research

以下に、上述の統計データやアンケート結果の分析に基づくこれまでの授業改善の経緯を、アクションリサーチの枠組みに沿ってまとめる。

### 5.1 サイクル1 (CL1)

#### (1) 計画

- 授業のねらいを「自律的な英語学習者を育成すること」とし、授業構成と学習活動計画を策定した。
- 読書目標は5万語に設定し、単位取得の為の最低要件とした。
- 技能目標として、以下の5項目を設定した。
  - 1) 多くの量の英語に触れる。
  - 2) やさしい英語の本がスラスラ読めるようになる。
  - 3) 自ら本を選び、楽しんで読めるようになる。
  - 4) 簡単な英語の本を読み聞かせ出来るようになる。
  - 5) おすすめの英語の本のあらすじと魅力について英語で紹介出来るようになる。
- 授業構成は、①授業内多読、②多読ガイダンス、③多読発展活動、④読書情報の共有とし、各構成区分において学習者のモチベー

ションを上げることを旨とした。また、4技能を統合する成果発表的な活動として⑤ビブリオバトル大会を前半と後半に組み入れた。

- 多読発展活動については、毎回様々なメディアを活用し、学習者の興味をかき立てつつ、リーディングのみならずリスニング、スピーキング、ライティングの技能につながる学習法を体験できるよう配慮した。
- コロナ禍にともなうオンライン授業の実施に対応すべく、Xreading（オンライン多読システム）を中心に、ポータルサイト（授業連絡）、LMS（教材配信）、Google Meet（授業配信）の4つのシステムを組み合わせ、オンライン学習環境を整えた。
- アセスメントテストとしてPearson社のプログテストを実施することにした。

## (2) 実践

- 授業内多読（構成区分①）については、授業開始後10分間、各自Xreading（オンライン多読システム）を用いて読書する時間を設けた。学生の要望により、授業後半（8週目以降）は読書時間を15分に延長した。
- 多読ガイダンス（構成区分②）については、以下のような項目について指導した。
  - ・ 英語を勉強することと英語を使って読むことの違いについて
  - ・ リーディングレベルに応じた本を選ぶ方法
  - ・ 興味のあるジャンルの本を選ぶ方法
  - ・ 読書記録手帳の使い方
  - ・ リーディングスピードについて
  - ・ 無理せず楽しく読む方法
  - ・ やさしい本のシリーズ紹介
  - ・ 英語のまま理解するという事
  - ・ 多読で語彙力が伸びる理由
  - ・ 読み方（黙読・聞き読み・音読）について
  - ・ 要約（Summery）を読む学習法
  - ・ 読書感想（Review）を読む・書く学習法
- 多読発展活動（構成区分③）については、以下のような活動を行った。
  - ・ ハリウッドスターによる絵本朗読視聴<sup>10)</sup>

- ・ オバマ前大統領夫妻による絵本朗読視聴<sup>11)</sup>
- ・ ストーリーテリング（英語圏の幼稚園の先生による絵本の語り聞かせ）視聴<sup>12)</sup>
- ・ オンライン図書（オーディオブック）の聴き読み
- ・ 語彙 e-Learning（Quizlet）<sup>13)</sup>
- ・ 要約を読む
- ・ ブックトーク（読んだ本の感想を話す）
- ・ ブックレポート（課題：1週間の間に読んだ本の中から1冊おすすめの本を選んで紹介する）
- ・ リーディングスピードの測定

- 読書情報の共有（構成区分④）に関しては、課題のブックレポートに書き込まれた内容をエクセルシートにまとめてLMS上に公開し、毎回の授業で紹介した。
- 上記の他に、毎回の授業の視聴確認として簡単なコメント（学んだこと・気づいたこと・質問など）を提出させ、その内容を授業内で繰り返す時間を設けた。
- ビブリオバトル（構成区分⑤）については、学生を3～5名のグループに分け、各チームで選んだ本を5分間英語で紹介し、その後3分間の質疑応答を行った。最後にクラスで投票を行って、最も読みたくなった本（チャンプ本）を決定した。
- この活動は学生の間で好評を得たため、後半の授業でもう一度行うことになった。

## (3) 観察と振り返り

- まず、履修者の8割以上（83%）が読書目標の5万語を達成したことに驚いた。履修者の英語力のレベルは多様であり（TOEIC130点～500点）、これは多読が幅広い学力層に適応するアプローチであることを示唆している。ただアンケートでは、5万語は大変だったという声があった。立ち上がりが遅く最終月に駆け込むリーディングパターンを是正する必要がある。
- アセスメントテストでは、preテストとpostテストの間に有意な差は見られなかった。4カ月5万語というインプットでは明らかな変化をもたらすのに不十分なのか、あるいは短期間でも効果をもたらす方法があるの



か、引き続き授業方法の改善を図りながら検証したい。

- 授業は全体を通しておおむね計画通りに進行したが、新設科目のため手探り状態で構築しながら進めた面もあり、指導内容や活動内容には、やや統一感を欠いた面もある。学習内容の配列についてももう少し統一感と体系性を持たせたい。
- 授業内多読（構成区分①）については、アンケートを見る限り学生の好感度は高いが、オンラインでは実際にどれだけ真面目に読んでいるのかモニターすることができないのが難点である。授業内多読をしっかりとさせるために、簡単な感想を書かせたり、あとの活動につなげたりする工夫を考える必要がある。
- 多読ガイダンス（構成区分②）は期待したほどモチベーションの向上につながっていないようである。講義なので、やや口幅ったい部分があるのかもしれない。ただ多読学習の指針となる個所なので、今後も学習の参考になる情報を提供していきたい。
- 多読発展活動（構成区分③）については、概ねどの活動についても興味をもって取り組んでくれたようである。ただ、活動を通して「読み方」にもいろいろあることや、多読をもとに他の3技能（リスニング、スピーキング、ライティング）の向上に広がっていったことに、どれだけ気づき、自分の普段の学習に取り入れるようになったのが重要である。以下のコメント（受講感想）から、ややその兆しが感じられる。
  - ・ 実際に英語が前よりも使えるようになったとは言えないが、英語に対する接し方を理解することが出来た。今後、英語を少しずつ使えるようにしていきたい。
  - ・ 多読をして英語を向上する方法（ママ）がすごくいいと思いました。
- 読書情報の共有（授業区分④）は、ほかの授業区分に比べるとやや評価が低いですが、これは毎回課題として提出するのを面倒だと感じたせいかもしれない。ただ、多読の習慣化を図る意味でも、学生同士で情報を共有してお互いの学びを促進する意味でも、続け

る意義があると感じている。SNS のように自分の体験を分かち合いたいと思えるような環境作りができればと思う。

- ビブリオバトル（授業区分⑤）は、非常に好評であった。このことはアンケートの受講感想にビブリオバトルに関する記述が非常に多かったことにも表れている。人前でも英語で話すことは緊張度も高いが、それだけにチームで協力してやり遂げた時の達成感が大きいのだろう。

## 5.2 サイクル2 (CL2)

### (1) 計画

- 基本的には CL1 の枠組みを踏襲したが、読書目標（単位取得のための最低基準）については4万語とした。
- 前半5回目までの授業の指針を「Xreadingの使い方に慣れる」、それ以降の授業を「さまざまな多読学習を経験すること」とし、学習内容の配列に配慮した。

### (2) 実践

- 授業内多読（構成区分①）については、CL1の例に従って授業前半では、授業開始後10分間行い、後半の5回は読書時間を15分に延長した。
- 多読ガイダンス（構成区分②）の内容は基本的にCL1を踏襲したが、後半は多読と英語力の関係に重点を置き、多読を用いた英語学習法に意識を向けさせるよう心掛けた。CL1から追加した事項は、「多読とスピーキングの関係について」で、Paul Nationの4/3/2というスピーキング学習法を紹介した。<sup>14)</sup>
- 多読発展活動（構成区分③）についても基本的にCL1を踏襲したが、特に授業後半で、多読をスピーキングにつなげる練習(4/3/2)を重点的に行った。自分が読んだ本の感想について1回目は4分、2回目は3分、3回目は2分で語るという練習法である。回を重ねるごとに無駄がそぎ落とされると同時に前回言えなかった部分が修復され、流暢さが養われる。
- 読書情報の共有（構成区分④）もCL1と同様の方法で行った。
- ビブリオバトル（構成区分⑤）については、それなりに盛り上がった感じを受けたが、意向調査で2度目はやりたくないという意

見が過半数を占めたので、1 回限りの実施となった。

### (3) 観察とふり返し

- 履修者の 85%が読書目標の 4 万語を達成した。リーディングパターンも CL1 に比べると改善している。しかし、アンケート(受講感想)を見ると、相変わらず 4 万語は大変だったと書いている学生がいたので、目標語数を下げた意味がなかった。逆に目標語数の設定は、もっと高くしてもよい気がしている。1 分間に 100 語 (100wpm) のペースで 1 日 10 分間、月に 20 日読めば 20,000 語になる。月ごとに計画的に読み進める習慣をつけるような指導を考えたい。
- アセスメントテストの総合スコアおよびリーディングのスコアにおいて上昇が見られたのは喜ばしい。何が功を奏したのか? 2 度目のビブリオバトルをやりたくないと言いながら、英語力の向上につながったと思う活動ではビブリオバトルの得票が高くなっているのは矛盾している。また、授業後半に重点的にスピーキング活動に取り組んだ結果はそれなりに現れているが (pre 16.5/post 20.6)、有意差を得るまでには至らなかった。中程度の効果量 ( $r=0.41$ ) は見られた。
- 指導指針の設定に基づいて、やや授業内容の配列に体系性が出てきたように思われる。さらに学習内容を基本から応用発展へと段階的に配列することを検討したい。
- スピーキング練習 (4/3/2) やビブリオバトルなどの応用発展活動の実施方法を工夫して、さらに充実させたい。

## 5.3 サイクル 3 (CL3)

### (1) 計画

- 目標語数については、いましばらく 4 万語に据え置いて様子を見ながら、幅をもたせた設定なども含めて効果的なあり方を検討することにした。
- Xreading の Assignment 機能を使えば、月ごとの目標語数が設定できることが分かったので、最終月を少なめにして、4 月:7,000 語、5 月:10,000 語、6 月 13,000 語、7 月 10,000 語に設定することにした。
- 授業計画は、全 14 週を Step 1 (試行期間)、Step 2 (習熟期間)、Step 3 (応用期間) の 3

期に分け、それぞれ「Xreading の使い方に慣れる」、「多読のペースをつかみ、読書習慣をつける」、「多読をベースにしたコミュニケーション活動を行う」ということを目標に、段階的に学びを進めて行くことが意識化されやすいようにした。

### (2) 実践

- Xreading に新機能が搭載され、オンラインで学生がどの本を読んでいるのかモニタリングできるようになったので、さっそく利用することにした。授業内多読の時間は、ほかの活動の時間を確保するため、学期を通して 10 分にした。
- 初回の授業および後半の 5 回の授業は、対面授業となった。後半の授業では、グループ活動やビブリオバトルを対面で行った。
- スピーキング活動は、4/3/2 を 3/2/1 に改め、初回 3 分、2 回目 2 分、3 回目 1 分で行うことにした。3 人ずつのグループで回せば、合計 20 分程度のグループ活動になる。また内容も、本を読んだ感想 (booktalk) のみならず、再話 (retelling) や絵の描写 (picture talk) など取り入れた。

### (3) 観察とふり返し

- これまでで TOEIC のレベルが最も高いクラスなので期待したが、なぜか反応が薄い感じがした。コロナ禍で、入学してからほとんど学校に足を運んでいないことが影響しているのかもしれない。後期も CL3 と同じ世代の学生が履修者の大半を占めることになるので、慎重に進めたい。
- アセスメントテストの結果は有意差なし。リーディングパターンも、月ごとの目標語数を設定したにもかかわらず、なかなか軌道に乗らず、後半の 2 ヶ月でまとめて読んだ感じである。後期は目標語数の設定を見直すとともに、計画的に読む習慣を身に付けるように仕向ける工夫をしたい。
- 初回の授業および後半の 5 回の授業は、対面授業となった。学習内容は同一でも、グループ活動やビブリオバトルは、オンラインで行った場合と対面で行った場合では、感触が全く異なった。ただ刺激もあったようだが、いまひとつ活発さに欠けた気がする。
- 学期終了後はまだ 2 ヶ月有効期間があるに

もかわらず、ほとんどの学生が読むのを止めてしまっている (CL1, CL2 も同様)。学期終了後の多読データにも注意するとともに、授業後も多読習慣を根付かせる方策を考える必要がある。

- オンライン図書は音声で聞くことも可能なので、その機能を活用して、リスニングに結び付く活動を拡充するようにしたい。

## 6. むすび

2020 年度の春学期より 3 学期間にわたる英語多読授業の授業実践と、アクションリサーチによる授業改善の試みについて報告した。

本研究は、多読の短期的効果と長期的効果を検証することを目的とする研究プロジェクトの一部であり、JSPS 科学研究費 JP20K00906 の助成を受けている。本稿で報告したように、これまでの観察では 4 万語～5 万語程度の短期間 (1 学期間) の多読では、英語力の質的変化をもたらすことは難しいようである。しかしながら、多読をやってよかったと感じる学生は多く、また低学力層においてむしろ伸び幅が大きい可能性があることや、目標語数を遥かに上回る学習者もいることが分かっている。したがって、このような知見を踏まえてさらに授業改善を図れば、短期間でもある程度の効果を出すことができるのではないかと感じている。さらに、多読を授業のみで終わらせず、その後も継続する習慣を身に着けるように導いていくことが、最も大きな課題である。

なお、多読の長期的効果の検証については、今年度より別途本学工学部、神戸学院大学、阪南大学と共同で多読サークル (ICERC: Intercollegiate Extensive Reading Circle) を立ち上げ、活動を開始している。参加者は 40 名 (各チーム 10 名) で、定期的なセミナーを行いながら、向こう 3 年間にわたる多読の効果を追跡していく予定である。

最後に、本稿を校正するにあたって貴重なご意見をいただいた査読委員に感謝を申し上げたい。

## 参考文献

- 1) 井村誠「オンライン多読システムを利用した授業の構成とアクティビティ」, 大阪工業大学紀要, 第 65 巻 2 号, 137~145 頁.
- 2) Xreading, <https://xreading.com/login/index.php> (accessed 2020-9-13)
- 3) 高瀬敦子『英語多読・多聴指導マニュアル』, 大修館書店, 2010, 33 頁.
- 4) R. Hunt and A. Brychta, *The Rainbow Machine*, 1990. Oxford University Press. Oxford Reading Tree series, Level 8 (英語母語話者 7-8 歳用児童書).
- 5) Pearson, <https://www.pearson.com/jp/> (accessed 2020-9-30)
- 6) 文部科学省, 各資格・検定試験と CEFR との対照表, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/03/\\_ics\\_files/afildfile/2019/01/15/1402610\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_ics_files/afildfile/2019/01/15/1402610_1.pdf), (閲覧日: 2021 年 9 月 19 日).
- 7) ビブリオバトル公式ウェブサイト, <http://www.bibliobattle.jp/>, (閲覧日: 2020 年 9 月 14 日).
- 8) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第 2 版』, ナカニシヤ出版, 2020.
- 9) 「質的研究とアクションリサーチ」 SLAA 研究会資料 (2016/0907), 2 頁. [http://www.u.tsukuba.ac.jp/~hirai.akiyo.ft/meeting16\\_質的研究の理論\\_アクションリサーチ\\_SLAA\\_発表資料.pdf](http://www.u.tsukuba.ac.jp/~hirai.akiyo.ft/meeting16_質的研究の理論_アクションリサーチ_SLAA_発表資料.pdf), (閲覧日: 2021 年 9 月 22 日).
- 10) Storyline Online, <https://www.storylineonline.net/> (accessed, 2020-9-14)
- 11) Storytime with President and Mrs. Obama <https://www.youtube.com/watch?v=U-hTKWCX7hc> (accessed 2020-9-14)
- 12) Oxford OWL, <https://www.oxfordowl.co.uk/> (accessed 2020-9-13)
- 13) Quizlet, <https://quizlet.com/>, (accessed 2021-9-19)
- 14) Nation, P., “Improving speaking fluency”, *System*, vol. 17, No. 3, 1989, pp. 377~384. [https://doi.org/10.1016/0346-251x\(89\)90010-9](https://doi.org/10.1016/0346-251x(89)90010-9) (accessed 2021-9-22)

